

学校に) 入ったんですけど、できたばかり。できて2年目ぐらい [注:介護福祉士の資格は1987年に誕生] かな。

《聞き手 A》入学したのが21ぐらいのとき？
《A さん》今でもあれなんですけど、あんまりものを考えないで行動するところがあって、介護福祉士も国家資格だから、高齢化社会もくるし、なにか資格があったほうがいいと思って。 [でも、介護福祉士の仕事が] オムツ換えるとかって思ってなくて。馬鹿なんですけど、笑い話じゃなくて本当に、最初の夏に実習じゃないけど [見学に] いったときに、すごいショックを受けて。本で読むのと実際のとはすごい違って、 [でも今の自分は] 大学もやめてるし、専門学校までやめたらもう本当にしょうもないと思って、卒業して資格を取ろうと決めた。
《聞き手 A》専門学校のときは、プライベートはどうでした？

《A さん》プライベートっていうか、やっぱり向こう [=ゲイについて] はデビューとかそういうのが遅くて、25に [ゲイの] 飲み屋いったのが初めてで、高校のときもすごい、灰色ではないけど [したいなと思いつつも] 何もしなかったし。それで、専門学校ではプライベートを充実させたいと思って、「ローターアクトクラブ」っていうのがあるんですけど。「ロータークラブ」ってあるじゃないですか、あれの青年版みたいな。18から29歳までの地域のリーダーを作ろうみたいな。で、それに入って、なんかみんなで。 [ゲイ雑誌の] 『BADI』が、自分が就職したときにできたのかな。

《聞き手 A》『BADI』ができたのは、 [A さんが] 23、4ぐらいのとき？

《A さん》ぐらいですね。

《聞き手 A》沖縄ですぐ手に入りました？

《A さん》たまたまいった書店にあって。どういうわけかはわからないんですけど、とにかくあって、もうびっくりして、嬉しくて買ったのを覚えてて。で、飲み屋とかいってあれ [=情報] は [手に入ったし]、これ [=BADI] に載ってる、ビデオを売ったりとか [してる] ゲイショップみたいなのがあったんですけど、見に行くのは実際、25ぐらいとか。

《聞き手 A》あいだが開くんですね。

《A さん》そうですね。急には怖いっていうか、普通にまったく情報がない中でも、与儀公園にはそういう [ゲイの] ひとたちがおるからっていうのは、那覇の人だったらけっこう知ってて、でもそこに行くのもなんかこう、親が警察官で、ちっちゃいときから、「お父さんに迷惑かけるようなことするな」っていうのが染みついてて、

介護職としての病院勤務

《聞き手 A》そのあとは、どうされたんですか？

《A さん》専門学校卒業後、病院で働いてたんですよ。2年間、介護職として。

《聞き手 A》じゃあ、25ぐらいまで。デビューしたのが25からだから、そこ [の職場] では何も言わず？

《A さん》何も言わない。ただ、モーションかけられたっていうのは、病院で [あった]、患者さんに。しかも、おじいちゃんだったんですよ。今だったら余裕もって受けとめるんだけど、すごい嫌だったっていうのをよく覚えてて。

[相手は] 風呂入れてるおじいちゃん。べつに風呂入れる必要もない、おじいちゃんっていうか60ちょっとぐらいなんですけど、小学校の校長先生を退職したってひとで、まあ僕が全部 [世話していた]。そのひとべつに、介護しなくていいんですよ。歩けるし。でも「お風呂入れて」って言われて、仕事だから「はい」つつって頭洗って背中流したりとかしてたら、なんかキスしてとか [言われた]。自分は、誰にもやったことないから、最初がおじいちゃんです。そういうこと言われて、 [自分の理想と] 違うかった (笑)。今だったら全然大丈夫なんですけど。

介護職を辞めての生活

《聞き手 A》で、また [職場を] 変わって。デビューも一緒 [のタイミング] ですよ？ それはなんでですか？

《A さん》仕事やめて、けっこうあいた [空白期間があった]。次の仕事を決めてやめたわけじゃないんで。米軍の中に、大学があるんですよ。そこへ進学した。 [中にいるのは] 軍人、軍人 [ばかり]。で、最初はゲイだけのバーとかじゃなくて、 [『BADI』の中の] 広告に載ってたところ。

《聞き手 B》「ちからこぶレディおだまりサリーちゃん」ですか？

《A さん》そう。それがいちばん最初なんですよ。

《聞き手 A》ちからこぶサリーちゃん [って何] ？

《聞き手 B》いやあ、なんか、そんな名前 [のゲイバー] なんですけど。

《A さん》そうそう。

《聞き手 A》すごい名前ですね (笑)。

《A さん》それが自分の [デビュー]。でも、ゲイのひとがいるとかじゃなくて、ノンケのひ

とがほとんどだったような。

《聞き手 B》[マスターを] やってるのはゲイだけど、お客さんはミックスみたいなの。

《聞き手 A》そのとき、仕事をやめたんですよね。仕事はなにかありましたか？

《A さん》米軍の大学にいつてるので、それをメインにしてアルバイトをしたりしてました。沖縄のひとと、どうのこうのっていうのはなかった。

《聞き手 A》大学に入ったんですか？

《A さん》入るっていうか、英語が好きだったんで、もともと最初は英文科だったぐらい。卒業までは至らなくて、あと、また保険会社で働いたり、抑うつとした日々。ゲイバーとかにもいくんだけど、最初の2ヶ月ぐらいは楽しかったんだけど、沖縄ではうまくいなくて、「30 [歳] を前にしてこういう生活はダメだ」と。何も捨てるものがないっちゃうか、ちゃんとキャリアを築いてたわけでも [なく]、もちろん結婚もしてないし、貯金もほとんどなくて、[東京行きを決意したのは] 今ぐらいの時期 [=11月] に、誕生日がくれば30っていうときでした。

沖縄から東京へ

《聞き手 A》東京に？ ゲイ関係はどうだったんですか？

《A さん》ゲイバーとかにはいったけど、それで誰かと出会って付き合うとかはなかった。

《聞き手 A》その [最初の2か月が過ぎた] あとはどうされたんですか？

《A さん》沖縄でゲイバーデビューした後、4年間ぐらいいなくて、またなんか「やっぱりいきたいな」って、東京へ出るちょっと前に [ゲイバーへいった]。

《聞き手 A》特にそこでは、ゲイ関係で何もなかったんですか？ 出会いがなにかあったり。

《A さん》出会ってっていうか、チラッと付き合いかけたひとはいたんだけど、それも自然 [消滅して]。それとともに飲み屋にもまたいなくなつて、「ああもう、沖縄にべつになに [=未練] もないから」って [東京へ発った]。

《聞き手 A》30 ぐらいのときに東京にいつて、最初にいかれたのは？

《A さん》池袋。

《聞き手 A》池袋には何年ぐらいいらっしたんですか？

《A さん》池袋は、ツテとか、友達とかなかったんで泊まって、an とか、アルバイトの本で、寮付きってところを探したら、居酒屋が [見付かった]。寮もあったんで、応募して、その次

の日から仕事。仕事はすごい大変で、大変だけだったらいいんだけど、働いてるひともすごい意地悪で。強烈に意地悪のすごいところで。寮だから、[半ば監視状態にあつて] 嫌でも働かないといけないんだけど、「もうやってられない」と思って、2週間いたんですけどやめて。

「東京いつたら、HIV の団体で働こう」っていう、ボランティアしたいっていうのがあつて、『BADI』とかの後ろに載ってる [団体を探した]。で、最初「A」 [=同性愛の人権団体] とか、あちこち電話かけるんだけども繋がらなくて、「P」っていうのも載ってたんだけど、名前だけではイメージがわからなくて。「A」とか有名なところだったらまだ [わかる]。[ほかに] 「H」 [=HIV の人権団体] とかも [わかる]。[それで結局] 「どこにかけても電話とらないから、しょうがないや」って気持ちでかけました、そこに [=P]。

[電話を] かけた日にたまたま、[P の職員の] I さんがいて、「ボランティアに興味あるんですけど」って。[I さんは] 「事務所に話聞きに来て。場所も池袋から高田馬場で近い」って。行って話して、「実は住むところもないんですけど」みたいな。カプセルホテルにいたんです。寮を出てから。

《聞き手 A》30 ぐらいのときですよ？

《A さん》29 でした (笑)。

《聞き手 A》こだわらねえ (笑)。

《A さん》で、話聞いて「ああ」って。知り合いが外国人アパートとかいって、「敷金礼金もいらなくて保証人もいない、そういうのがいいんじゃないの」とかいって紹介してもらって、池袋の外国人アパートに住んで。

「P」に入ったことで、自分のゲイライフがすごい広がって、「ゲイの友達がほしいなあ」と思ってたのも探せるし、世界が広がったっていうか、「P」に関わったことで、ゲイライフが充実した。なんか、できた恋人とかも、ぜんぶ「P」関係で。「何しに来たのか」って感じなんだけど、そうですね。

《聞き手 A》仕事は、何か探しましたか？

《A さん》仕事は、最初は日雇い。居酒屋やめてからは、日雇いっていうかなんか、引越しの仕事をしたりとか、なりふり構わず、とりあえずお金が尽きかけてたので、ペリカン便の仕事を。日払いだったんで。あと、イベント警備のアルバイトがすごい高かったんで [やった]。

《聞き手 A》そうすると、30 ぐらいまで [日雇い派遣で] ？

《A さん》そうこうするうちに、自分は英語が好きで、英検1級とか持ってたんですよ。でも

通訳とか、英語の仕事をしたことはなくて、ずっとやりたいと思って。たまたま求人広告に通訳の募集なんだけど「未経験可」みたいな。こんな珍しい募集はない、って。普通、簡単な、通訳の中でもいちばん下が、募集あったんで、それを〔やった〕。

《聞き手A》ボランティアは継続してやってらっしゃいました？

《Aさん》ボランティアは、通訳の仕事をするようになってからは、定期的にはできなくなって。それ〔=通訳の仕事〕は、地方にアメリカからエンジニアが来て、そのエンジニアと一緒に日本の工場にいて作業するって〔いう内容〕。東京じゃないんですよ、働く場所。日本全国、九州にいたり。毎週何曜日にボランティアにいくとかっていうことはできなくなって、空いてるときにいくみたいな。だけど、ずっと関わってはいたんですけど。

《聞き手A》ボランティア活動してたのは、どうでしたか？ いろんな出会いも増えたわけですよ。

《Aさん》もう、ここにきてなかったら、あのとき電話してなかったら、もっと暗い人生だったんじゃないかなって。すごい楽しくなった。沖縄にいるときは、中学までも、高校とかも、ひととあんまり、自分を出したくないっていうか。沖縄のゲイコミュニティにも、足を突っ込みかけて自分でまた引っ込んで。トータルで2ヶ月ぐらいしか飲みにもいかなかった、ゲイの友達っていうのも1人もいなかった。〔東京へ出てきて〕生まれて初めて、恋人も〔できた〕。

《聞き手A》全国を仕事で回るようになりますよね。それでとりあえず安定して。プライベートのほうはどうですか？

《Aさん》生活の安定といっしょに〔プライベートも充実してきた〕。最初付き合ったひとと「P」のひと、次に付き合った人もPの人で、すごい好き〔だった〕。でもそのひとは〔ほかのひとと〕付き合っていて、とりあえず自分の気持ちは隠して、別れた途端にアプローチ(笑)。

《聞き手A》そうすると、仕事もあるじゃないですか。けっこう大変な生活〔だったのでは？〕……

《Aさん》その〔=通訳の仕事をしている〕ときはまだ、付き合ってたんですけど。

《聞き手A》何年ぐらい付き合ってた、かつ、仕事がそういう〔飛び回らない〕仕事に？

《Aさん》仕事は、3年近くその通訳をやったんですけど、いったん沖縄に帰ってきたんですよ。2004〔年に〕。ずっと東京にいて7年ぐらいとかじゃなくて、いったん沖縄に帰ってきて、

1999年に東京に〔越してきて、いろいろあってまた沖縄に帰ってきた〕。

《聞き手A》2004年っていうと、いくつなんだろう。

《Aさん》2003年の暮れに沖縄に帰ってきて、沖縄で語学学校に通って、通訳の講座があるので〔受けて〕。通訳のレベルとしては〔自分は〕低かったし、まだまだっていうか、東京に何年かいたら、単身だけだとちょっと疲れてくるところがある。

沖縄県がお金を出して通訳の学校に派遣する、学費も生活費もぜんぶ県が出す同時通訳者養成事業っていうので、「試験受けないか」ってその通訳の学校にいてるときに先生に話されて、また東京に派遣される。35〔歳〕から去年〔2007年〕の10月までいった。

《聞き手A》で、また東京に派遣されて、どこに？

《Aさん》I〔=語学学校〕って〔というのが〕、虎ノ門にあるんですけど。あとは、練馬に住んでいた。

《聞き手A》仕事と生活が東京に戻りますよね。で、プライベートは？

《Aさん》東京にいったら必ず「P」と関わるので、また「P」で〔活動した〕。で、〔沖縄から〕戻ったぐらいに、自分が好きだったひとを、ちょっと、自分のほうから攻めたっていうか。一目ぼれだったんですよ、そのひと。

《聞き手A》今の仕事を始められたのは？

《Aさん》〔2008年の〕6月からです。

《聞き手A》〔沖縄に〕戻っていらっやって、ゲイ関係は？

《Aさん》それは、最初は沖縄のゲイコミュニティにかかわるつもりはなかった。去年戻ってすぐに、〔Pの〕Iさんから電話があって、「いま沖縄のゲイサークルの子がきてるんだよ」って感じで。「沖縄に帰ったんだから、なんかやったら？」みたいなことを言われて。ただ、沖縄に戻ってひと月ぐらいで、すぐに神戸に働きにいったんです。11、12、1〔月〕。去年の。10月に帰ってきたんだけど、11、12、1〔月〕は〔神戸に〕。神戸から沖縄に戻ってから、Iさんに紹介された沖縄のゲイ団体のイベントを手伝ったりしました。

《聞き手A》今、ゲイをやっていることには満足ですか？

《Aさん》満足ではないです。っていうのは、両親と同居してるんで、一人暮らしもやって、同居する〔ようになる〕と、きつい。一人暮らしのときは、呼べますよね、恋人でも。もちろ

ん同居ではそういうことは[できないってことは]、ないと思うけど。

(2)いまは、ゲイでも不自由はしていません。
-沖縄に住む性的マイノリティ男性 T さんの
ライフストーリー-

Tさんは、東京で生まれ、沖縄で育ったゲイ男性である。聞き取り時点で、24歳。生まれて1歳になるときまで東京で暮らし、その後はずっと沖縄で暮らしているという。家族構成は、両親と姉、兄、そしてTさんの5人。2世帯住宅で、おじいさんとおばあさんもいるが、おばあさんは現在、高齢者施設におり、一緒には暮らしてはいないという。以前は、おじいさん、おばあさん、お母さんで地域の商店を営んでおり、お父さんはクレーンのオペレータをして生活をしてきたが、おじいさんとおばあさんに介護が必要となったことから、商店は閉めたという。お姉さんとお兄さんはすでに結婚をしており、現在は別々に住んでいる。聞き取りは、2008年11月に、那覇市NPO活動支援センター会議室で行った。聞き手は、加藤慶と金城健である。

サッカー好きな小学生時代

《聞き手》小学校入学前とあって、幼稚園とか保育園とか行っていましたか？

《Tさん》幼稚園は行っていました。鮮明に覚えている記憶は、先生に怒られてたことかな(笑)。悪いこととしてつねられたりとか、弁当忘れたとか。[弁当忘れて、]周りの友達からちよつともらったりとか。それぐらいかな。

《聞き手》やんちゃ系[な子ども時代]ですか、そうすると。

《Tさん》いやあ、どうなんですかね。もうみんな同じようなこと言い出して、周りの友達も[やんちゃ系だったから]。

《聞き手》そのときは何かこう、男の子と[の関係]は？

《Tさん》いや、ないです。

《聞き手》小学校は地元？

《Tさん》地元の小学校。自分なんかは、1年のときと2年からの小学校が別々であって、転校したというか、[2年にあがるときに]学校が新しくできたんですよ。新しくできたから、途中からみんな転校になった。転入みたいな感じ。

《聞き手》そっちの、もともとの小学校に残っているひともいれば、新しい学校にいったひとも？

《Tさん》いったひともいる。地域によって分

かれますね。[前の学校が]歩いたら30分ぐらいのところ、新しくできた学校が5分ぐらい。むっちゃ良かったですね。

《聞き手》小学校を振り返って、印象に残っていることは？

《Tさん》べつに[印象に]残ってることは、まあ、うーん。兄ちゃんがちょうど5こ上だから、同じ学校にきょうだいがいるっていうの。半分嬉しかったけど、[その兄ちゃんに]いじめられてたから、半分嫌でしたね。兄ちゃんと物の貸し借りをしてたから、6年生の教室にいかないといけないんですよ。たまに「返してー」みたいな。そしたら、「ヤー [=沖縄弁の「お前」] の弟か」みたいに兄ちゃんが[兄ちゃんの友達に]言われて、「兄ちゃんは」「違う」って。「じゃあ、[俺は] 誰よ」みたいな(笑)。それが嫌だったけど、こういう絡みが良かったのかな、兄ちゃんに[とっては]。ある意味、きょうだいじゃないとこういう絡みできないじゃないですか。そのあとは絡みとか[なかった]、学校かぶることが絶対にないから。[年齢的に] 姉ちゃんとは絶対にかぶらないし。

《聞き手》初恋っていつでしょうか？

《Tさん》5[年生]か4[年生]ぐらい。新しく学校移って、2クラスしかないから、みんな友達なんですよ。

《聞き手》どれぐらいの規模だったんですか、その学校って？

《Tさん》1クラス30名の2クラス。1学年60名いたかなあ、ぐらい。それで、仲良しだし、なんか、あるときくっついてくるじゃないですか、小学生って、男女でも。で、「この子はこの子」みたいな感じで一緒につるんでたら、たぶんあれが初恋だと思うんですけど。

《聞き手》同じ学年の女の子ですね。初恋だから、告白したってわけではない？

《Tさん》しなかった。もうなんだろう、周りでくっついてるから、誰も告白はしないんですよ。「〇〇が××好きー」みたいな感じでくっついてる、みたいな。

《聞き手》今でも会ったりしますか？

《Tさん》そのひとにですか？ 同じ地域の集まりだったりとか、中学校も全部一緒だったんで、同期会とかだったらたまに顔見たりするぐらいだけど、全然いまは[恋愛感情はない]。「あ、このひと初恋なんだ[つけ]」みたいな。そのひとに対しては何もないですね。

《聞き手》そのとき[小学校時代]はとくに男の子には興味はない？

《Tさん》ない。一緒に遊んでるぐらい。

《聞き手》「オカマだ」って言われたりとかも

ない？

《Tさん》ない。ないけど、女の子と遊ぶのも男の子と遊ぶのもどっちも同じぐらい多かったんですけど、仲良い女の子とかいるじゃないですか。遊んでたらなんか、男子メンバーからはあんまりよく思われなくて。若干、いじめなのかな。いじめっぽいのはあったりしました。プリントぐじゃぐじゃにされたりとか。だけどべつに、必要ないプリントだったから。興味なかったし。

《聞き手》他の男の子は女の子とほとんど遊んでいないのに、[Tさんは]遊んでるから[いじめられた]？

《Tさん》そう。仲良いから、たぶん嫉妬なんですかね。[嫉妬]っぽい感じ。自分はそういうのあまり気にしてなかったから、周りの女子が、「やめれ」みたいに言って[るけど]、「別にいいじゃん」みたいに、こっち[自分]は。当事者はべつにどうも思っていないみたい。

《聞き手》どんな遊びしてたんですか？

《Tさん》公園行って、みんなでおいごっことか、木登りとか、あんな感じ。[男子も女子も]同じ、みんな一緒に遊んでる状態。ちょうどいちばん近い[場所にたまたまいた]のが女の子だったりとかしたんで[女の子とよく遊んでるように見られた]。小学校4年でサッカー部入ったんで、そのときはほとんど男子としか遊んでない、っていうか部活ばかりだったから。

《聞き手》サッカー楽しかったですか？

《Tさん》楽しかったですね。基本的にディフェンスずっとやってたんで、攻めてこられて、ボール取って、前のひとにパスして、前のひとがシュート決めてくれたら、それで全然嬉しかったです。ボールを奪いにいくのが好きでした。

《聞き手》それ[部活]は、学校内の？ 地域の？

《Tさん》学校内の。[当時]できたばかり。児童オリンピックってあるじゃないですか。あれで、[校内に]サッカー部がないから、立ち上げよう、みたいな。どんなことやったかな。みんなで45分の休み時間とかサッカーやって、「やってるメンバーはみんなでサッカーやろう」みたいな。それで部活が始まった、みたいな。続かない子は続かない子でやめてったりとかして。児童オリンピックでみんなけっこう、陸上とかやり始めたりしたんで。

《聞き手》サッカー部、何人ぐらいいたんですか？

《Tさん》何人ぐらいかな。普通に2チームは余裕で作れるぐらいはいたんで、22名以上。でもやっぱ、二つ上の先輩がまだいるじゃない

ですか、6年生までいるから。自分らの[同年の]年がいちばん多かったですね。ちょうど担任のひとが、サッカー部の監督みたいな感じだったから、もう一つのその学年の[クラスの]子たちがいっぱい集まって、5、6年の[サッカー部にくる]ひとは、サッカー好きなひと。そのとき[90年代後半]、すごいJリーグ流行った時期だったから。サッカーゲームとかみんなやってるじゃないですか。あんなので、「俺もサッカーやりたい」みたいな感じで来て。めっちゃサッカー流行ってましたから。Jリーグチップスとか(笑)。

《聞き手》今もサッカーはやってるんですか？

《Tさん》今はやってないです。小学校だけです。中学校からは、親に「サッカーはやめれ」って言われて。兄ちゃんがずっとサッカー部だったんです、高校まで。今はたまにしかやってないけど。兄ちゃんけっこう怪我が多くて、タックルされて転んで上にひとが乗っかったりとか、足折ったりだとか。だから、[母が]すごい心配性なひとだから、「お願いだからサッカーやめて」みたいな感じで。サッカーと一緒に、小学校の1、2年ぐらいから剣道をずっとやってたんですよ。それで「なるべく剣道やって」みたいな。

《聞き手》じゃあ、中学校からは剣道部に？

《Tさん》入ろうと思ったら、剣道部がちょうど潰れてて。それで「何部に入ろうかなー」って探してたら、友達に「テニス部立ち上げたいんだけど、人数[あわせのために]入ってくれないか」って言われて、他に[やりたい]部活ないからいった、みたいな。それでテニス部入って。

男友達に告白された中学校生活

《聞き手》地元の中学校ですか？ 何中？

《Tさん》地元のです。N中学校。[1クラスに]30か40[人]ぐらいで、6クラス。

《聞き手》中学校では恋愛はどうでしたか？

《Tさん》中学校入って、違う小学校からも女の子が来たりするし、サッカーと剣道やってたから、違う小学校の子たちも、剣道が地域のクラブだったから、もともと違う小学校のひとでも知ってたりするじゃないですか。「同じ中学校になったねー」みたいな。で、女の子は、K小学校っていうのがあって、その小学校はけっこうヤンキー率が高い。僕らなんかはめっちゃ平和なんですよ、A小学校ってところは。B小学校ってところも全然平和。[中学校に上がって]なんかヤンキーっぽいのが入ってきたから「すげえー」みたいな。女の子なんかもスレ

てるっていうか、[その当時の視線で見れば]大人っぽいイメージがあるじゃないですか、ヤンキーっぽいひとつ。 「あー、すごいかわいいなあ」みたいな。

《聞き手》女の子ですよ？

《Tさん》そうですよ。全然、ゲイじゃないです。同じ学校[出身の子]は、全然。ずっと部活やってたんで。それより先輩にけっこう従いましたね。

《聞き手》でも中学校を振り返って、恋愛感情ってありました？ その先輩とかに。

《Tさん》恋愛感情自体がなかったから。「付き合いって何？」みたいな状態。「付き合いって、何[するの]？」みたいな感じなんですよ、もう。それよりテニスとか剣道とかやってるほうがすごい楽しかったから、色恋の話はぜんぜん興味ない感じ。

《聞き手》クラスの普段の生活の中で[色恋沙汰の]話って出ることありましたか？

《Tさん》出なかったですね。進んでるK小学校の子たちは、「〇〇と××が付き合ってる」みたいな話は[するけど]、「へー」みたいな感じで終わるんですよ。

《聞き手》「男の子と女の子で付き合ってる」って話？

《Tさん》うん。

《聞き手》じゃあ、特に男同士とかそういうのは？

《Tさん》なかったですね。

《聞き手》中学校でいちばん思い出に残っていることはなんですか？

《Tさん》中学校で思い出すと、ああ、めっちゃ衝撃的なことありましたね。男友達に、コケられたって言えばいいのかな。中3の頃なんですけど、生徒会活動とかしてて、遅れて部活にいかうとしたとき、部室へいったときに部室のドアのそばに友達がいる、「今からか？」みたいな話になって、「ああ、ちょっと遅れたから」って。「急いでいかないといけない」みたいな感じになって、その友達が普通に[行く手を]ふさいでくるから。それで、[部室の]鍵持ってるじゃないですか。鍵開けて入ったらそいつも入ってきて、「[着替えて]すぐ出るけど？」みたいな。そしたら、ババババってすぐ着替えてるうちに、後ろから倒されて。ズボンはいってたんですけど、上からこすられて。で、そいつは勝手にイって。

《聞き手》どう反応したんですか？

《Tさん》もう、意味がわからないんですよ。「はあ？」みたいな。「何やってるか？」状態。そいつ、めっちゃガタイ良かったから。自分が

超ちっさい、前ならえでコレ[先頭で両手を腰につける]の状態だったんで、かなうはずがない状態。で、もう、こすられて、そいつもズボンの上からこすってて、みたいな感じ。そいつは脱ぎもしないで、こすって、こすられて、[1人で勝手に]イって、何もなかったように普通に出てって。「はあ!？」みたいな、全然意味がわからない。「何されたの、俺？」みたいな。エロ本とかも全然、見てたから、「こういう世界もあるんだ」みたいな[ことを知った]。そのときに初めて。

《聞き手》今、会ったりとかします？

《Tさん》全然会わないですね。

《聞き手》1回きり？

《Tさん》いや、そのあとも自分がトイレいくたびについてきて、しっこしてるときに後ろから、とか(笑)。

《聞き手》タイプでしたか？

《Tさん》タイプとかっていうレベルじゃなかったですね、もう。意味がわからないから。「何してるが？」みたいな感じ。「何してるのかな？」みたいな。「ひとくるぜー？」みたいな。嫌じゃないですか、自分もそう[変態的に]思われたら。

薔薇族事件

《Tさん》ちょうどそれと同時期じゃないですけど、[同性愛の雑誌の]「薔薇族」が落ちてたんですよ、体育[倉庫の]近く、部室のこのトイレに。中学校の[トイレに]薔薇族が。で、みんな、その時期ぐらいに、エロ本見てるときに、エロ本の中の伝言板みたいなものがあるじゃないですか。あれにホモって書かれて、「ホモって何か？」って話になるじゃないですか。そのときに「男同士でやってるんだぜ」「へー」みたいな。で、エロ本では[知識を得て]知ってるじゃないですか。で、実際にいたじゃないですか。たぶんその人は、今はホモじゃない。ただ、ヌキたいだけ。エロビ[デオ]とか見て、「こんなのする」っていうのがわかるじゃないですか、自分たちだって。で、真似て[やりたいんだけど]、「女にやったら絶対問題になるから」ってことで、自分にやってきたのかな、って。今はそう思うんですけど。

「薔薇族」[を見つけた]のときは、すごいもう、てんやわんやですよ。トイレの前が、みんな[集まって大混雑]。みんな「すごいよ、すごいよ」って見に来るじゃないですか。見て、「へえーっ」みたいな。「[この学校にも]いるよ、いるよ」[って言いたい]みたいな。言わなかったですけど。

《聞き手》その彼[先輩]が持ってきたのかな？
《Tさん》たぶん違うと思う。なぜか中学のトイレに「薔薇族」が落ちてた、みたいな。衝撃的でしたね、それは本当に。

テニス生活に邁進した高校生時代

《聞き手》中学校を卒業して、高校に入りますよね。高校は地元ですか？

《Tさん》隣の町です。隣の、C高校っていうところに。もうそのときも、部活ばっかりの状態。テニス部で。高校1年で、もう剣道は終了っていうか、そっからもう練習場所が遠かったんで、いけなくなって、テニスばかりやっ

て。
《聞き手》小学校から高校までずっと一緒に進学した子っています？

《Tさん》まあ10数名しかいなかったですね。

《聞き手》高校入って、部活動しながら、男の子との関係ってどうでした？

《Tさん》特に、普通の友人関係。

《聞き手》女の子とかは？

《Tさん》同じ高校の女の子とは普通につるんで、違う高校の子と付き合いとか。

《聞き手》いちばん思い出になってることは？

《Tさん》いちばんの思い出は、高3のときに[仲良くなったひとがいて]、高1、高2ではけっこう[普通に]友達だったんですけど、高3のときに、クラスが隣になって、授業もかぶることが多くなって。合同授業みたいな、「成績が良い子は違うクラスで、その子たちより劣る子たちはまた[別の]」みたいな、2クラスに分かれている授業があったんですよ。それで体育も数学も、国語の授業とかもかぶるようになって、教科が1教科の先生が[どのクラスでも]一緒だから、テストが一緒だった。で、一緒に勉強するようになって、自分のうち来て一緒に勉強教えたりとか。今でも仲良い友達なんですけど、それからけっこう仲良くなって遊ぶようになって、そいつ学校落ちたから、一緒にどっかいたりとか。

修学旅行もいかなかったんで。修学旅行が自由参加だったんですよ。軽く10万ちょっとかかる。東京とか北海道だったりするんで。「それよりは自分は[学校外の]テニスクラブ通いたい」って言って、テニスクラブに通わせてもらう資金にしてもらって。だから高校の思い出は、[高3のときできた友達の話を除くと]同じ高校のひとたちよりかは、違う高校のひととつるんで遊んでるほうが楽しかったかな、っていう。[学校外の]テニス[クラブ]のメンバーで遊んでるのが。

《聞き手》テニスクラブっていうのは、地域の？

《Tさん》もう全然、友達同士で集まってテニスコート借りて、練習、みたいな。だから、部活にはいるけど、ほとんど顔出してない感じ。ランキングだったらけっこう上のメンバーで集まって、連絡取り合って、「今日〇〇で練習するから、来る？」「いくいく」みたいな。で、それぞれで集まって練習したりとか、そのほうが楽しかったですね。バイクは一応持ってたんで。原付だったんですけど。それでけっこう移動して、テニスクラブの上の[先輩の]ひとたちなんかとつるんでると、コーチなんかでもうけっこう年上じゃないですか、普通に。20代のコーチとかもいたから、そのひとたちと遊びにいたりとか。

《聞き手》高校時代は楽しかったですか？

《Tさん》学校生活が楽しかったかって聞かれたら、わからないですね。外でテニスクラブだとか、テニスクラブ以外の友達と遊んでるのが楽しかったんで。学校は、ただ行って勉強してるだけ、みたいな。部活もほとんど出てないし。昼休みに友達と、ちょうど新しくなって4階建ての校舎だったんで、4階の誰も来ないところで、友達4、5名ぐらいでご飯食って昼寝したりとか。いちばん広いところで。それから、海が隣だったんで、階段のところ行って、友達がタバコ吸い始めて、そこに一緒にいたりとか。たぶん僕は吸ってなかったと思いますけど。

《聞き手》ゲイだって自覚したのはいつごろですか？

《Tさん》高校卒業して、専門学校入ってから。

《聞き手》じゃあ高校時代までって、自分を何だと思ってたんですか？

《Tさん》そういう世界があるっていうのは知ってたけど、全然自分はそういうの[性的指向]はないっていうか、高校入ったら全然、そういうのはあったけど、忘れてるっていうか。そんな感じ。

《聞き手》スポーツのほう[に夢中]で、性のところには興味がない？

《Tさん》ですね。オナニー始めたのも高校なんで、自分[は性はあまり興味がなかった]。ほんとにテニスにハマって、テニスばかりやってる。飯も食わないで朝から夕方まで、夕飯抜き、みたいな。飯食うのも忘れるぐらいやってたんですよ。で、3つ上の、[学校が絶対に]かぶってない、クルマもってる先輩なんかと夜遊びしたりとかが多かったから、学校の先輩とつるむっていうのが[なかった]。1こ上の先輩が部活にいかなかったっていうのもあるんで

すけど。

部活の先輩がいなかったから、[学校外のクラブで] 2こ上と3こ上 [の先輩がいるという状況] だったんです。それでも、「上のひとつるんでるほうが楽しい。同級生と遊んでも面白くない」って自分の中で覚えてしまって、同じ学校の同い年の子と遊びにいったっていうか、そんなのないんですよ。[交流があるのは] 学校の昼飯時間だけ、とか。あとはもう、先輩と、学校のテニスの友達と遊びにいたりとか。遊ぶっていても、テニスやってたんですけど。《聞き手》じゃあ、性に関する違和感っていうのも高校時代は特になかった？

《Tさん》興味なかったです。

両親に反対された進路選択

《聞き手》進路選択で迷ったりとかはしなかったんですか？

《Tさん》中学校ぐらいから、体育の先生になりたいっていうのがあったんですよ。[進路指導の一環として] 将来の夢とかいろいろ書くじゃないですか。そのときにもう、[第1希望が] 「体育の先生になりたい」とか [第2希望が] 「インストラクターになりたい」って。インストラクターっていうのもほんと漠然としていて、「なんかスポーツ教えたい」みたいな。高校だったら、テニスにハマってるから、「テニスのインストラクターになりたい」って。で、第3がないんですよ。もうこれ [体育教師かインストラクター] だけ、みたいな。自分の中で。だから、体大 [=日本体育大学] にいきたいっていうのがものすごいあって、けどお兄ちゃんの大学生活を見てて、1、2年すごいダルダルだったんですね。それ見てて、めっちゃ大学いきたくなく [なっ] て。

《聞き手》お兄ちゃんは体育系の大学じゃなくて、普通の？

《Tさん》お兄ちゃんは普通の、沖縄の [大学]。沖国 [=沖縄国際大学] だったんですけど、全然もう [ダルダルで]、「こんな生活したくない」って。それだったら専門学校行って、専門的な知識学んで、大学編入、って、まだ親には言っていなかったんですけど、「すぐ勉強したい」っていう。

《聞き手》じゃあ自分の中では専門学校進むときに、もう大学まで視野にいれて？

《Tさん》いれて、[専門に] 入ってました。けど、親は夫 [父親] が高校中退、おかんが高校行ってなかった、かな。だもんで、「大学までいかせたい」っていうのがあったらしくて。最初は琉大 [琉球大学] の教育学部の保健体育

[学科] 受けるって話をして、センターとかもめっちゃ勉強してたんですよ。けど、進路選択になって、いろいろ考えて、福祉もやりたいてってその頃にちょっと興味出して。おバア [=おばあちゃん] が倒れたっていうのがあったんですけど。脳梗塞で倒れて。で、「福祉もやりながらスポーツも教えたい」ってなって。で、お兄ちゃん見てるじゃないですか。「大学いったら無駄なお金も使うし時間も無駄だし」みたいな [考えが] あったから、専門学校でスポーツ福祉の専門学校探して、何件か探したんですけど、「内地に行くのはちょっと、勘弁」みたいなのがあって。

お母さんとお父さんに最初話したとき、めっちゃ反対されて。「なんで大学いかないの。大学いけ」みたいな。「なんでよ」みたいな。めっちゃ喧嘩して。おとう [=父] に話しても埒があかんと思って、おかあ [=母] に話をして。おかあも最初めっちゃ反対って、もう、[俺は] 部屋に立てこもり。親がいる時間、絶対に部屋から出ないで、学校いくときも、ベランダから出て学校行って、みたいな。絶対見ないように。で、もう、一週間ぐらい [そういう生活を続けた]。でも、話さないと、お金出してもらおう立場だから。勝手に学校説明会いたりとか、全部調べて、お母さんのほうに最初、報告を。で、「兄ちゃんみたいにはなりたくない。あんなダラダラした生活したくない。すぐ勉強したいし」って、ぜんぶ学校の説明とかして、「こうこうこうで、こういう資格取れる」とかって。

お母さんは「もともと『あんたがやりたいうようにやりなさい』って [言ったから云々]」 [って言った]。最初反対されたから、「なんだよ、親、言ってること違うし」みたいな話して、お母さんは納得したけど、お父さんには自分から話さないって言われて。めっちゃ嫌で、それが。「味方に付けるために話をしたのに、どうしよう」みたいな。で、どうにか話して、そのときに「大学編入もできるから」って条件で、「大学院もいきたい」って、いきたいけど、大学1年の一般教養は高校の勉強って話をいろいろ聞いてたから、「いま高校の勉強をちゃんと真剣にやってるし、成績もそんなに悪くないから、すぐ専門の勉強したい」って。中学校のときにも、体育科のある学校に進もうとしたら、反対されて普通科にいった状態だったから、これだけはもうどうしても自分がいきたいところいきたいと思って。で、お父さんに話をして、どうにかこうにか認めてもらって。もう [進路指導の] 先生も二の次だった。先生に話したら、「いや、それでも受けなさい、受け

なさい」だったから。それでもう、3年のときの先生がめっちゃ嫌いになった、すごく。「お前のノルマのためだろ？」とか思ってしまって。「なんで自分の進路、自分がちゃんと決めて調べてきてやってるのに、自分がもう大学受けないって決めてるのに、なんでこんな勝手に進めるの、なんで自分が決めたことを後押ししてくれないの」と思って。

だからさっき話をしたみたいに、「外に出たい」っていうの、それもあるんですよ。「いろんなものを視野に入れておかないと、もし教員になったときに、この〔受け持った〕子たちにいろんな道を後押しできない」というのがあるから、外に出たいし。この〔ゲイの〕世界入ってよかったなっていうの、それもあるんですよ。ゲイの世界に入ったのも、それはそれでよかったかなって。ストレートな時期もあるし、そういう〔ゲイの〕世界があるのもわかるし。他の普通の体育教員よりかは、セクシャリティ的には全然、幅広いな、自分、みたいな。っていうのは、すごい得してるなっていうのがあるんですけど。今になって〔思うこと〕ですけどね、それは。

《聞き手》専門学校の受験を認めてもらったわけで、受験して、合格されたんですね。

《Tさん》面接だけだったんですけどね。

《聞き手》受かったあと、両親はどうでした？

《Tさん》一応、そこそこ成績は県でベスト16ぐらいには入ってたから。スポーツ特待生で入ろうとしたら落とされたから、それ以外で受かって、内定通知は出てたんですよ。「特待生取れなかった、ごめんなさい」みたいな話で。それでもう、お父さんはひたすら「はあ、大学行ってほしかったなあ」みたいな嫌味を僕、ずっと言われて。シカト（笑）。お母さんは、「いったからには頑張りなさいよ」って。

《聞き手》で、4月に入学しますよね。何年間の学校ですか？楽しかった？

《Tさん》2年間。もう、超楽しかったですね。勉強もほんとに自分が興味あることをやるし、友達もみんなそれで集まってるひとたちだから、とても学習意識も高いから、勉強環境すごいよかったんですよ。前の席を取り合い、みたいな。

《聞き手》友達環境も充実してたんですね。

《Tさん》すごい良かったですね。その友達と普通に遊びにいったりもしました。

女性と男性へ両方向く性的関心

《聞き手》プライベートのほうはどうでした？

《Tさん》うーん。高3〔の卒業〕までの間に

彼女できたりもしたんですけど、あんまり興味なかった。「一緒にいたのも、そういう関係なんだらうな」と思って。相手に悪いと思って、コクったりして一緒にいる、みたいな感じだったんで。高3でもう、部活も引退じゃないですか。同じ〔学外の〕テニスクラブの違う高校の女の子と付き合うようになって、高3の就職活動時期ぐらいからテニスのインストラクターのバイト始めてたんで、今度は〔その女の子が？〕レッスン生って形になったんですね。

で、レッスン生と付き合ってた、専門学校入って、あっち〔彼女〕は沖国〔沖縄国際大学〕って、自分は専門〔学校〕って、そうすると〔生活〕時間合わなくなって別れて、たまたまその時期に、スポーツ科学で体の勉強とかいろいろするじゃないですか。病気の勉強とかもしてるときにエイズの〔ことに触れる機会〕があって、ネットとかで調べるじゃないですか。そこでまたゲイっていうのが出てきて。

8月ぐらいからレポート作成してるときに、友達が出会い系サイトで騙されてお金振り込んだりしたんですよ。それですごい「出会い系ってこわいね」みたいな話になって。「男と女が会う」というのはすごい簡単な話だと思ってたんですね。携帯が普及してるじゃないですか。で、エイズの勉強してるときに「ゲイ」ってキーワードが出てきて。「同性愛者の感染率がすごい高いですよ」みたいなのをやってるときに、「そのひと〔エイズに感染しやすい同性愛者〕ってどんなひとなんだろうね」みたいな話を友達とするとときがあったんですよ。したら、友達が出会い系サイトで騙されてるじゃないですか。「〔ゲイにも出会い系が〕あるんじゃないん？ ネットで探してみる？」みたいな話になって。

探してると、めっちゃすごい数がヒットして。「へえーっ」みたいな。「こんな〔ゲイの〕世界があるとは知ってたけど、〔規模が予想以上に〕すごいな」みたいな話になって、ひとつのサイトを開いて。文章だけのやつ。「今から会いませんか」的な、掲示板みたいなを見て「きっと〔今ごろ実際に〕会ってるんだ」って。それから、〔自分がゲイだと〕意識しはじめたわけじゃないんですけど、ちょいちょい友達と見るようになって、「すごいな」みたいな。ひとりでも見るようになって、〔そのとき既に〕彼女と別れてるから、たまーに、すごいスキたい衝動が出て。

掲示板見てて、なんか一方的〔にヌイてもらおう〕みたいな話がよくあるじゃないですか。男に対してそういうの〔とくべつ男としたいとい

う欲望)もなかったんですけど、「ヌイてもらえるならべつに、[男でも女でも]一緒かな」みたいな感覚で見てて。

最初はもう、メッセージが送れないんですよ。怖くて。どんなひとが来るかわからないし。初めてメッセージを送ったときに、自分が想像してたゲイの最初のイメージがあって、若干太ってて、老けてて [=中年で] みたいな。そういうイメージがすごいあったんですよ。で、まあ、かぶってた、みたいな(笑)。「やっぱこんなもんなんだー」みたいな感じで。掲示板の使い方も全然わからない状態。で、ヌイで、「こんな簡単に会えるんだ。ヌキたくなったらこれ使えばいいじゃん」みたいな感じの感覚 [=ゲイとの付き合い方]、最初は。その間に彼女できたりとかして、そのとき [=彼女がいる間] は全然使わないんですけど、専門 [学校] 1年のときに、彼氏ができたのかな、初めて。[ゲイといたら] おじさんなイメージがあったけど、初めて同い年の子と会って、「若い子もいるんだ」ってなって。その子とは一切そういう [=性的な] 関係はなかったんですけど、「ゲイってさー、こんな [=太った中年というようなステレオタイプなイメージそのままの] ひとしか [ほとんど] いないんじゃない？」みたいな話してたら、「むっちゃカッコいいひといますよ」みたいに言われて、「あ、マジ? 会わせて、会わせて」みたいな。興味あるじゃないですか。そういうやりとりしてて、教えてもらって、[紹介されたひとと] やりとりするようになって。

相手 [=彼女] には、すごい失礼なんですけど、男と付き合うってことにすごい興味が出てきてしまっただけ。あっちがすごい自分に好感を持って接してくれたから、興味で付き合いしまった [のに罪悪感を覚えた]。その「興味」が「好き」なのか何なのかわからない状況で付き合い合ってたから。「興味」が「好き [と同じもの]」って勘違いしたのかな、たぶんそのときは。で、付き合い、男と付き合うってすごいさっぱりしてる感覚だと思ってたんですよ。べつに自分が彼女いたときも、「友達と遊びに行く」 [って言う] と「うん、遊びにいけば? 自分といるときは自分と一緒にいるからべつに」みたいな感じだったから、男もそんな感じ、みたいな [ふう] に思っていた。女のひとよりすごい、自分が「遊びに行く」って言ったら「は? 誰と?」みたいな、そんな [執着が強い] のが多かったし、「今日一緒に遊ぼう」みたいな [誘い] が多かったから、自由っていうか、若干束縛 [されてる] みたいな感じじゃないですか。

「男と付き合う」っていうイメージが、自分の中では友達と遊びに行くなら「遊びにいけば?」 [って快く送り出してくれる] みたいな、束縛っていうのがない状態、っていうイメージで、楽に、友達みたいな感じで付き合い合っているイメージがあって。自分の勝手なイメージで。[いざ実際にゲイのひとと] 付き合ったら、すごい束縛されて。「はあ? 全然違う」みたいな。で、エッチも面白くなくて。初めてやられた感じ。穴を。全然気持ちよくないし、痛いだけだし、「こんなだったら男と付き合わないほうがいいし」みたいな。気持ちよくないエッチして、面白くないじゃないですか。「こんなもんなんだー」みたいな。半年近く付き合い合ってたけど、[付き合いはじめて] 2ヶ月ぐらいから「このひとのこと [本当に] 好きなのかな? 好きじゃないかも」みたいに考え始めて。でも半年だらだら付き合い合ってたけど、今ではたまに連絡とったりするぐらい。やっぱ初めての彼氏だし、[今も] 友達なんですけど。[ゲイ] 専門で始めてそういう関係を持った [のがそのひと] って感じですね。最初は、自分の知らない世界ばかりだから、楽しかったっていうのはありますね。

《聞き手》そのひとにいろいろ教えてもらったって感じですか?

《Tさん》[ゲイ関連の] サイトとかいろいろ見せてもらったりとか、動画とか見せてもらったりとか。

《聞き手》じゃあ、専門学校時代では、アルバイトは充実してました?

《Tさん》してたと思いますね。学校も楽しかったし、バイトも。何回かバイトのことで悩んで沖縄から逃げ出したこともあったんですけど。内地に半月ぐらい。2年のときになったら、もう [ゲイの出会い系] サイトも [ルールやマナーを学んで] ちゃんと使えるようになって、内地の [ゲイの] ひとが来たときに一緒に遊んで、仲良くなって、そのひとのうちに泊まりにいたりとか。[ゲイの] カップルとなるべく仲良くなって。そしたら [恋愛や肉体の] 関係を持つことはないじゃないですか、絶対に。で、向こう [=内地のゲイのひとのうちに] 行って、泊めてもらって、一緒に遊んだりとか。

《聞き手》それは何歳ごろ?

《Tさん》19か20歳ぐらい。

《聞き手》専門学校に2年間通って、大学に2年次編入だから、大学生活は3年間ですよ。大学に編入してみて、どうでしたか?

《Tさん》勉強が、専門 [学校] のときに比べて、やってるひととやってないひとがすごい分

かれるし。「何しに来てるんだろう、このひとたち」みたいな。専門学校って、自分なんかの〔通った〕学校が特別だったと思うんですけど、勉強しに来てるひとが多いから。〔編入して〕M 大学行ってたんですけど、レベルの低さがすごい。自分の中で「教員免許取るだけのために来た」って自分で割り切って、それ以外は学校にいない。だから、学校生活っていうのがよくわからないですね。「キャンパスライフ楽しいよ」ってみんなに、大学ってるひとから言われてましたけど、「どこが？ 全然面白くないし」みたいな。

《聞き手》大学を振り返って〔恋愛関係での〕男性関係はどうでしたか？

《T さん》大学行って初めて、男も女も含めて、同じ場所での恋人っていうのができたんで、すごい楽しかったと思う。

《聞き手》彼女もできたって聞いたけど？

《T さん》〔その話に出てきた〕彼女は、〔同じ大学とは〕違います。同じ大学生でできたから、楽しかったっちゃ、楽しかったかもしれない。

《聞き手》どれくらい続いたんですか？

《T さん》そのひとも3ヶ月ぐらいしか続かなかった。相手が、「すごい自分がフリーな感じだったんで、好きなか不安になる」って。テニスの練習を、1時間の練習のために名護じゃなくて那覇にずっと行ってたんで、頻繁に那覇にいくもんだから、連絡はしてるけど、何してるかわからないじゃないですか、あっちからしたら。それで、まあ、〔不満が〕あったのかな。

《聞き手》大学ではゲイ関係で何か困ったことってありますか？

《T さん》大学内ではべつに、そういうのやってなかったんで。ほぼ一人暮らしだったんで。実家にも月1回帰るぐらい。那覇にいても、実家寄らないで帰る、みたいな。

《聞き手》女の子にはもう全然あれ〔＝興味ない〕ですよ。

《T さん》あれ〔＝興味ない〕ですね。このときに、僕一人暮らしだから、専門学校の友達を〔沖縄〕中部から呼んだりとかして、「この日飲み会します」みたいに飲み会企画して、じぶんちでめっちゃ飲み会してたんですよ。パーティーっていうか、人集めてワイワイするのが好きなんです。お酒飲まなくても。〔そのために〕買い出しいたりとか、そういうのが好きで。で、〔ある日〕集まったときに、友達に、専門学校のすごい仲良い友達だけど、すごい自分の中で壁があった〔ひとがいた〕んですよ。「言えない部分がある」っていうのがあって、専門学校卒業のときに、卒業旅行みたいなのを

みんなでしたときに、友達に、自分の幼なじみの彼女と同じ学校だった子がいたんですよ。自分の前の彼女を知ってる女の子。同じクラスだった、みたいな。その子に「俺はさあ」みたいな、初めてカミングアウトしたんですよ。「ゲイっていうか、男もいける、バイセクシャルなんだよね」みたいな。

その女の子はすごい、自分の彼女のことも知ってるし、その〔卒業旅行に〕いった日って、彼女とよりを戻した日だったんですよ。全部、ほとんど彼女とか話は知ってるから、この子には隠しても自分的に面白くないな、と思って、みんなで飲み会ワイワイしてるときに「ちょっと来て。実はさ」みたいな。「彼女、知ってるの？」みたいな。「いや、言うわけないよね」みたいな。

でもなんか、こんな〔ふうに〕して自分がちゃんと話せない部分があるっていうのが自分の中でちょっと嫌だったから、この友達がすごくわかってくれる友達で〔よかった〕。わかってくれるといっても、〔こちらからもあまり〕すごいことは言えなかったんですけど。自分の中でも、「あなたが認めてくれなくてもべつに自分は〔よくて〕、迷惑かもしれないけど話して自分のことがわかってもらえばよかった」みたいな。自分の中で壁をなくしたいっていうのがあって、話をして、全然その女の子は「そうなんだあー」みたいな、驚き。

専門学校のよくつるむメンバーは、何名かにカミングアウトして、両刀扱いされてましたね。けど、〔ゲイというかバイであることを〕知ってる友達でも「彼女作らんがー？」みたいに普通に話してくるし、全然、環境は何も変わらなかったですよ。最後に自分のうちで飲み会したときに、すごい自分が好きで付き合ってた彼氏がいたんです。自分が初めて、「このひとのことが好きだ」って思って付き合った彼氏がいて。〔友達に〕みんな、彼女ができたりとかしたら「彼女できたってばー」って紹介してくれたりとかして、恋を共有してたんですよ。自分も共有したい、けど、〔自分は男なのに相手は〕「男」っていうのを、どうしても言いたいけど言えない、っていうのがあって。

でも、その女の子に「話をしたいけどみんなに壁があって話しきれないし、自分の中でも隠してるのも嫌」って話をして、2人でずっと話をしてたんですよ。「たぶん、こいつらは大丈夫だよ」って言って、この女の子が言ってたのは、「『T 君が好きなんだったら、べつに男でも女でもいいんじゃない？』ってみんな言うと思うよ」って言って。その女の子も、「T 君が

好きだったら自分はいいと思うし」って言うてくれてたんですよ。で、飲み会を企画して、「この日に言おうね」みたいな話をしてたんですよ、その女の子と。

「ちょっと話したいことがあるってばー」みたいな話をして、「こうこうこうで、みんなのことすごい大好きだし、友達だと思ってるけど、1個だけすごい引かかることがあったから」って話し出して、「はあ、なにになに？」みたいな、みんな飲んでるけど真剣に話を聞いてくれて。「じゃあさ」って言うて、簡単に言ったらセクシャリティの最初の段階の話をして、「みんなもエイズの勉強とかしてるし、そういうのはわかると思うけど、レズビアンとかゲイが色々あるんだよ。その中にバイセクシャルっていうのがあってさ。みんなは両刀使いっていったらぶん分かりやすいと思うけど。ヘテロ・バイ・ゲイ・レズで言ったら、その中で自分はバイのほうにあたるわけよ。なんでこんな話をしたかという、このひとが好きになった。なんだろう、人間性にすごい興味をもって、[好きに] なったひとがいて、そのひとが男なんだよね。みんなワイワイして楽しいし、みんなも[彼氏彼女のこと] 話してくれるけど、自分は話せないっていう、すごい壁があって、若干寂しい部分もあった」みたいな話を。

驚いてるひともあるんですよ。いちばん仲良いやつで、彼女の話しかしてないやつもいたから。「いや、女の話しかしてなかったし、俺にー」みたいな。「若干、男のひとのことをかわいって思ったときもあったんだよ」みたいな話をしたりとか、「悩みがあって」とかいう話もして。友達なのに、みんな号泣するの、そのときに。泣きながら話をして。「ああ、やっぱこいつらに話をしてよかった」って思っ。みんな、その女の子が言ってたように、「T君が好きだったら、自分なんか全然、歓迎するし、来たとき会わせてくれたらいいよ」みたいなこと言ったから。今でもみんな、専門学校のメンバーはみんな仲良くて、忘年会とかで毎年1回会うんですけど、けっこう人数集まるんですよ。

《聞き手》専門学校の友達のほうが、大学の友達より？

《Tさん》より、深いですね。共有した時間が、すごい濃い。実習にしろ何にしろ、みんな一緒に動いてたから。

《聞き手》今、お仕事したり、大学行ったりとかした中で、不都合はなかった？

《Tさん》んー、特にはないんですけど、まあ、職場では女の子に「ずっと彼女いない」とか[話

題が] なったりしたときに、そういう話が出るじゃないですか。笑って過ごすんですけど、若干、「[そのケが] あるんじゃない？」って本気で言われたりすることもあったりとか。だから、ちょっとびっくりしますよ。

それとか、周りに若い子で中性的な子が増えてるじゃないですか。男なのに女の子みたいな子がすごい増えてるじゃないですか。IKKOさんとか、色々出てきて、番組でも「おネエMANS」とか、色々やってるじゃないですか。ああいうのがあって「世間にもそういうひとがいる」ってすごい広まってきて、職場で色々お客さんと話をしてるときに「そういうひとが増えてるんだよね。若い子でもすごい多いんでしょ、今？」みたいな。自分がいま彼女いないって[ことを]、お客さんでも知ってるひとだったら「そうなの？」とかって、急に[話を] 振られたときに、ちょっとびっくりする。本当に。極端に反応しすぎたら[変だし]。反応の仕方がちょっとよくわからない。

《聞き手》お客さんのほうから「オカマなの？」っていうような？

《Tさん》「男好きなんじゃないの？」みたいな。どう反応していいかわからないときがあるんですよ。過剰に「違いますよ！」って言うのか、「そうかもしれないですねー」って言うのか[どちらが正解に近いかわからなくて]、反応に困るときがあったりとか。

《聞き手》[今のお仕事は] スポーツクラブのインストラクター、だよな？ 楽しいですか？

《Tさん》そうですね、楽しいですよ。全然、もう。いろんな年代のひとがくるし、いろんな話が聞けるし。いえが1人暮らしから実家に戻ってきたぶん、いい感じになった男性をおうちに呼びづらい。呼んだとしても、先輩って形ですね。「先輩がちょっとパソコン使いたいから来てる」とか「遊びに来てる」って形で。頻繁に来た場合、親が怪しむ。

《聞き手》親はまだ何も知らない？

《Tさん》何も。まあ、親には、専門学校の女友達とよく遊びに行くんで、「〇〇[=女友達] と遊びに行く」っていうふうに[話を] 作ってるんで。そういうふうにもっちゃ隠してるところがあるんですけど、たぶん[カミングアウトの形で] 言うつもりはないんですけどね。

《聞き手》いまは自分のことをゲイだって思えますか？ それともバイセクシャル？

《Tさん》今は、ゲイ。

《聞き手》ゲイということで人生を振り返って、満足してますか？

《Tさん》今は完全に、完全にというか、ゲイ

寄りって言ったほうが正しいのかもしれないんですけど、気になる、興味をもつひとが今は男のひとなのかな、っていうのがあるんですね。「このひとを好きになる」っていう。「べつに『男のひとを好きになってる』っていう感覚じゃないのかな」って、たまに考えたりするんですね。「どうなんだろう、これは」って。男に興味があるのは確かじゃないですか。興味はありますよ、やっぱり。けど、好きになるとか、付き合ったりするっていうのは、みんながみんな「男だから興味がある」とかじゃないのかなあ、と。「このひとだから好きになってる」のかなあ、と。まだ自分でも全然わからない。自分の気持ちがどういうふうになってるかが、全然わからなくて。でも今は、男のひとにすごい興味があるからこのゲイの世界で遊んでるし、そういう友達もある程度、18 からもうこの世界入って、友達もある程度できてきて、仲良くなってるひともあるし、全然、不自由してないって言ったら全然、不自由はしてないですよ。全然もう、深い話のできる友達もいるんで。満足はしています。

D. 考察

本調査は、沖縄県において生活する男性同性愛者当事者 2 名からライフストーリーを聞き取り調査したものである。そこで語られるライフストーリーには、友人たちや進路選択の関係の中で、現在まで生きてきた人生そのものが読み取れる。

E. 結語

今回は、研究倫理の観点から、2 名の方の聞き取りのみを掲載したが、日本社会学会倫理規定にもとづく研究指針に従ったうえで、研究倫理に関するデータ処理をさらに行い、今回掲載できなかった方たちのライフストーリーをも含んで研究を継続し、沖縄の特徴をより明確化していく作業が必要であると考えられる。

F. 発表論文等

なし

フライト・アテンダントへの道—ある 30 代ゲイ男性からの聞き取り—

研究協力者：福岡安則(埼玉大学教養学部教授・博士(社会学))

黒坂愛衣(東京外国語大学非常勤講師・博士(学術))

佐藤太郎(早稲田大学教育学部学生)

渡邊 文(埼玉大学教養学部学生)

聞き取り概要

東京生まれの 30 代ゲイ男性のライフストーリー¹。匿名希望の A さんは、1977 年生まれ(聞き取り時点で 32 歳)。外国の航空会社の客室乗務員をしている。

ゲイ当事者の「自己アイデンティティ」および「自己肯定感」の問題をめぐる、この聞き取り事例から得られる知見として、以下の 2 点を指摘できよう。

① ライフストーリー聞き取りは、語り手に“自分がどのように生きてきたか”を語ってもらうものであるため、聞き手は、調査の主題となる事柄についてのみ質問するのではなく、むしろ、語りの展開に即し、さまざまな事柄についての質問を

することになる。今回の A さんからの聞き取りでも、聞き手は、調査の主題である彼のゲイという属性にかかわる事柄だけでなく、語りの展開に即すかたちで、さまざまな質問をした。それでも、調査の目的——今回であれば、ゲイ当事者から人生のお話を聞くこと——が、事前に語り手と聞き手のあいだで共有されていたわけだから、一般的にあって、その主題へと語り収束するはずだった。

にもかかわらず、A さんの語りは、どちらかといえば「ゲイとして」というよりも、「客室乗務員として」というほうに重心が置かれるものとなった。小学生のときからの夢をかなえるまでの努力や、現在の仕事について語るとき、A さんはとくに生き生きとした表情をみせ、サービスのプロフェッショナルとしての自負を感じさせた。「ゲイである」ことではなく、むしろそのほかの属性のほうを自身のアイデンティティの核として生きている当事者が存在することを、A さんの事例は示している。

ひとは一般に、年齢／性別／職業／世代／出自／国籍／性的指向……といった数多くの社会的属性をもっている。そのなかのどのあたりに生活の重心をおき、自己アイデンティティの核とするかは、個人によってさまざまだ。それなのに、ある一面だけ——たとえば「ゲイである」ことだけ——を取り出して当該の個人をみてしまうなら、人間関係であればひじょうに抑圧的なものとなりうるし、社会調査であれば現実をとらえそこなうことになりかねない。その意味で A さんの語りは示

¹ 聞き取りは、2010 年 1 月 5 日、埼玉大学教養学部の演習室で、ちょうど 3 時間、おこなった。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、ゲイ当事者の佐藤太郎と MiFGID 当事者の渡邊文。

音声おこしを「語り」として編集するにあたっては一人語りの形式を採用したが、聞き取り場面で語り手自身が口にできなかった言葉を、「語り手の言葉」であるかのように挿入することはしていない。どんな質問への応答であるかを示すために、あるいは、文意を通すために補った言葉は、すべて亀甲カッコ〔 〕に入れた。また、ルビの代わりに丸カッコ書きを用いたが、「同性愛(それ)」のように、語り手が発した言葉の「音」の再現と「意味」の伝達を両立させるために用いたばあいもある。

公表の許可を得るために、語り手に原稿を提示したところ、「みなさんの雰囲気に僕自身がすっかりリラックスしてしまい、個人的に公表を避けたい部分がいくつかありました。内容を一部修正した上で公表していただきたい」との返事をもらい、2010 年 2 月 19 日、ふたたび埼玉大学にご足労いただいて、いっしょに修正・削除の作業をおこなったことを断り書きしておきたい。

唆的である。

② 語り手は、子どもの頃から、ゲイという属性にむけられる外側からの否定的なまなざしを感受してきた。子どもどうしのあいだでは異質な少数者にたいする“いじめ”の文化があった。さらに、同性愛を笑いものにするようなテレビ番組が流行っていたし、学校では異性愛を前提とした教育がされていた。Aさんは、小学校低学年の頃には自分の性的指向に気づいていたが、そのことを「他人には言わないほうがいい」と思っていた。また「男性どうしでつきあうという概念がなかった」とも語っている。

こうした経過がありながらも、Aさんは現在、自身が「ゲイである」ことを否定的に受け止めてはいない（友人の主宰する当事者活動の手伝いをしていることから、それがわかる）。Aさんの語りからは安定した自己肯定感がうかがえる。その背景には、子どものときから将来の夢を強くもち努力を重ねて実現してきたという彼の特質のほか、就いた職業がたまたま「ゲイが多い」世界だったという偶然（幸運）もある。働き出してからは学生時代の友人とはしぜん疎遠になり、現在は、自分がゲイであることを知っている人との交友関係が中心である。広がったネットワークのなかで同性との交際も経験した。両親へはすでにカミングアウトしている。現在、ゲイであることの苦労は「あまりない」とAさんは語る。ゲイ当事者にとって、“自己の属性を隠さないですむ人間関係”や“おなじ属性をもつひとと出会える場”がいかに重要であるかを示唆する事例である。

小学校低学年で好きになった子が男子だった— —誰にも言わないでおこう、と

1977年〔生まれ〕。〔いま32歳。〕東京で生まれました。

父親はサラリーマンです。もう定年退職〔しましたけど〕。〔母は〕専業主婦です。〔きょうだい〕は弟が1人。2つ違いです。

〔自分がまわりにいる多くの子どもたちとはなんか違うなっていうことは〕けっこう小さいときに、気がついてましたね。自分が好きになる対象が男の子だっていうのは、小学校の低学年ぐらいには。はい。自分が、あっ、この子が好きだなと思った対象が、たまたま男の子だった。〔それで〕みんなと違うっていうので、まあ、言わないほうがいいんだろうなっていうのを、子どもながらに〔思って〕。〔ずうっと誰にも〕言わなかったですね。

幼稚園は3年〔行きました〕。ふつうに、まあ、遊んで。昼寝が嫌いでしたね。幼稚園って、お昼寝の時間とかありますよね。ぜんぜん昼間眠れなくて、あれがすごく苦痛だったのを、いま思い出しました。いちおう、布団のなかに入って。なんで、この1時間、横になって目をつぶってなきゃいけないんだろう、っていうのを、ずっと思っていましたね。

〔あとは〕受付の台が高くて困るなっていうの思っていました。幼稚園の受付が、先生を呼ぶのに、そこから呼ぶしかないんですけど。なんて効率が悪いんだ、っていうのをずっと。〔思い出すのは〕そのくらいですかね。

当時はあまり物怖じしなかったですね。いまは、なんか、あまり知らないひとにはかかわらないほうがいいかな、と。だれかの友だちとかだったら、安心ですけど。あまり知らないひとと仲良くなろうという感じでは、最近ないですね。〔それは〕とくに、社会人3年目ぐらい〔から〕ですかね。

小学生のときは、剣道をやりました。嫌いでしょうがなかったです。従兄がやっていて、話の流れで、「じゃ、やろっか」と一言いったら、ほんとにやることになって。冬は寒いですし。面をかぶると、子どもって、なぜか、顔がすごく痒くなるんですよ。搔けないっていう意識があるからか。で、しょっちゅう、こう、鉛筆で〔お面の〕中を搔いたりして（笑い）。3年生ぐらいから6年生までやりました。〔でも〕強くならなかつたで

す。剣道にあまり興味がなかったんですよね。剣道で強くなりたいというのもべつになく。ほんとに、なんか、とりあえず、まあ、行くかあ、と思っ
て行って、1時間半とか2時間とか、はやく終わらないかな、ってことだけを考えてましたね。
はい。

我慢強いのかと言われると、最近、そんなことないと思いますね。大人になって〔からは〕プライベートではあまり我慢をしなくなったかもしれない。いま思い浮かんだ例が、単純なんですけど、行列ができてたら、もういいや、とか。

〔友だちは〕男の子の友だちと遊んでました。自転車とかよく乗って、みんなで遠出をしたりとか。あと、ローラースケートがすごく流行った時代で。つるんで。みんなで乗って遠出をしたりとか。まあ、でも〔遠出と〕言っても、隣の駅ぐらいなんですけどね。

〔学校では〕クラスに激しいいじめはなかったですね。なんかいじめられてる子がいたのは、おぼえてます。ちょっと、なんていうんだらう、体格がちいさくて、勉強もあまり得意じゃなくて、言葉がすぐ吃ってしまう子がいたんですけど、その子がクラスでからかわられてたのと、あと、女の子で1人……。〔いじめって〕度のすぎた、なんだらう、からかいですかね。無視とかではなかったですね。女の子のなかに、1人、男の子から避けられている子がいましたね。その子はたまたま痣(あざ)があったかなんかで。小学校とかって、そういうのがすごく……。いま考えると、なんでそんなことをみんなが言ってたんだらうってあれですけど。それぐらいですかね。休みの日もクラス全体で出かけることも多くて、けっこうクラスは仲良くしてましたね。

〔勉強は〕あまり。地理とかは好きだったんですけど。算数が大嫌い。〔成績は〕まあ、中ぐらいですかね。

〔マンガですか?〕うちにあったマンガは『キン肉マン』がすごい多かったんですけど。ぜんぜん

『キン肉マン』、好きじゃなくて。弟がすごく好きで。でも、なんか、とりあえずあるから読んでいたのと、あと、『[月刊]コロコロコミック』とかは読んでいたけれども、なにがあったか、あまりよく覚えてない。弟が買っていて、家にあるから読む。そういうのが多かったですね。

テレビは、小学校のとき、なんか、ドラマを見てたのを覚えています。〔テレビを見る時間は〕長くはなかったですね。けっこう早寝でしたね。あまり遅くまで起きてなかったです。最近の子どもが夜遅く、すごいちっちゃい子が出歩いているのを見て、ああー、そうなんだ、って、けっこうびっくりするぐらいに、早く寝かされてましたね。

ファミコンは、やりました。「ドラクエ」と「スーパーマリオ」と、あと、「チャレンジャー」、すごい初期のころの。〔ファミコンも〕1時間とか決められてましたね。父親は仕事で夜遅かったのも、母親が「1日1時間」とか決めてました。

〔父親は〕けっこう温厚ですね。よっぽどじゃないかぎり、怒らない感じで。家の中でなにかが起こったら、だいたい怒るのは母親なんですけど。まあ、よっぽどのときには、父親が怒るっていう感じですね。

〔父親に怒られたのは〕小学校2、3年とか、そのぐらいですかね。小学校のころから〔ぼくは〕理由がわからないで、物事をするのが嫌でしたね。けっこう、車酔いをする体質だったんですけど。遠出をしたときに車に酔って。「とりあえず出なさい」って言われたんですけど、なんで出なさいいけないのかわからない。べつに、出たところで吐き気がおさまるわけじゃないし。いま考えれば、吐くんだったら、車の外に吐いてほしい、っていうことなんですけど(笑い)。親がそれを言わないから、べつに出たところで治らないから出ない、と思って。でも、それを話すほどの元気もなく、けっきょく、車内で吐いて。吐いたあとに、「吐くんだったら……」って言われて。だったら先に言ってくれば出たのに、って思うことがあったん

ですけど。けっこう、いまでも、なになにをしないでください、だけだと、なんで、っていうのをよく【思いますね】。なになにだから、これをしてください、だったら納得できるんですけど。結論だけだと、いまだに納得できないことが多いですね。

〔母親〕のほうが、うるさかった印象がありますね。「宿題しろ」とか。まあよく言えば、教育熱心。実を結ぶことはなかったですけど。

弟とは、あまり趣味が似てなかったですね。小さいころは一緒に遊んでましたけど、小学校中学年くらいからあまり一緒に遊ぶこともなかったですね。

小6で客室乗務員に憧れて

〔将来、何になりたいと思ってたか、ですか？〕小学校6年生のときに、はじめて国際線の飛行機に乗って、ハワイに行ったんです。それまで飛行機は、男性はパイロットで、女性はスチュワーデスと思っていたら、客室乗務員のなかに男性がいて……。小学校5年生のときまでは、電車の車掌さんになりたかったんですね。小学校6年生のときに、男性の客室乗務員を見て、あ、これになりたいと思って、それからずっとそうでしたね。はい。飛行機の特殊性がまず好きで。なんか、限られてる空間じゃないですか。で、そのなかで、けっこう、なんでもできてっていう特殊性と、あと、なんか、機内サービスの、あのカートから出てくる物とか、ああいうのに憧れて。

〔そのときのハワイへの便は〕覚えてます。ノースウエストで行きましたね。〔サービスは〕子どもだったので、その善し悪しがあまりわからなくて。なんかもう、ただ、ご飯とか飲み物をいろいろ出してくれることに、すごく満足して、楽しんでましたね。〔その旅行は〕祖父と家族4人で、1週間ぐらいですね。〔うちは〕田舎がなかったの。同級生は夏休みに田舎に帰ったりとかしてたんですね。それがなくて、まあ、その代わり。

国内線も、その前に乗ったのは、小学校5年生のときに、四国に行ったぐらいですね。泊まったのは【どんどこだったのか】ぜんぜん記憶ないですね。飛行機は覚えてました。全日空のトライスターでした。子どもながらに、ジャンボじゃないのかあつてがっかりしたんです、当時は。

〔小6でキャビンアテンダントになりたいと思ってから、気持ちが揺らいだこと〕はないですね。必死に頑張ればなれる、といまは思います。前の会社にいたときに、大学生の就職指導をしたんです。頑張れば、ほんと、なれると思うんですね。自分も、就職活動をした頃はできることは全部しました。英語もだし、面接対策とか履歴書書くのとかも、もっとやろうもっとやらなくちゃって。自分の中で妥協したら絶対なれないだろうっていうのがあって。ただ、自分が指導をする立場になったときに、なんか、なりたいたいと言ってるわりには頑張っていない子が多いなとは思いましたけど。ほんとになりたいのか、なればラッキーなのか、どっちなんだろうっていう子が多くて。もったいないなあって思いました。

自分は社会の主流じゃない、と

〔中学のときの友だちですか？〕中学校でいちばん仲良かった友だちは、当時、おたがい、そうだっていうカミングアウトはしてなくて……。大人になって、まあ、ゲイだったというのがおたがいわかって。当時はおたがいにゲイどうしだとはわかってなかったですが、でも実際はゲイだった子がいちばん仲良かったですね。話をしてて、すごく【気が】あったんですね。——うちの中学校は2つの小学校から来てたんです。〔彼は〕もうひとつの小学校から来ていて。好きにはならなかったです。アハハ。気はあいましたね。

〔当時、言葉として〕「同性愛」は、あったんじゃないですかね。「ホモ」とか、なんか、よく聞く単語としてあって。まあ、自分がそこに属するんだろうなと思ってましたけど。あの、〔フジテレビ

の)「仮面ノリダー」とか、保毛尾田保毛男(ほもおだほもお)とか、「とんねるずの[みなさんのおかげです]」[っていう]コメディでやってたところに、「ホモ」という言葉がすごく周知された感じじゃないですか。あのころに、ああ、自分はホモなんだなど。中学校のときにはすでもうブレイクしてたんで、[見始めたのは]小学校ですね、たぶん。小学校のときに、先生たちとみんな近く公園に行き、ちょっと小高い山とかで、みんなでワイワイやっていると、なんか、保毛尾田保毛男の真似をしてる子がいたの。

[自分はそこに入るんだろうな、って思って、そのことは]他人(ひと)には言わないほうがいいんだろうな、と。円滑に、この先、生きていくにあたって。——それを隠していることにたいして、自分のなかでストレスも、べつに感じず。まあ、言わなきゃいいだけなんだっていう感じでしたね。

[学校での性教育ですか?]ありましたね。小学校高学年のときに、男女別に体育館とかに集められたのと、あと、中学校、高校の保健体育とかですね。でも、中間テスト、期末テストのために聞いているって[いう感じ]。教科書にこう書いてあるからテストでこう答えようみたいな、そういう感じでしたね。[エイズの話は]あまり記憶に残ってないですね。

[異性愛を前提とした教育がされることについては]自分が社会の主流じゃないっていう意識があつて。だから、教科書に同性愛(それ)が書いてなくても、違和感もなく、まあ、そういうものだろうと。

英語の勉強にうちこむ

[中学校のときは]この仕事に就きたいっていうのだけがあつて。で、この仕事に就くために、英語を勉強して。早く大人になって、できれば、クルーの仕事をしたくて。でも、たぶん、かなわないだろうと、自分のなかで思っていて。でも、空港とか航空会社で働きたいっていうのがある。

そのためには早く大人になりたかったんですね。中学校、高校の頃は、早く卒業したいなと思っていて。それなりに楽しかったですけど、人生のなかで、なんか、通過点的に当時は思っていました。

客室乗務員には、たぶんなれないと思ってたんですね、その当時は。無理だろうと思ってたけど、でも、なりたいていうのはあつて。客室乗務員になれなければ、空港の職員だとか、あとは、本社とか、チケットの発券するひとだとか、そういうエアライン関係では仕事がしたいなっていうのは思ってたね。[乗務員でも]キャビンアテンダントだけに興味があつて。パイロットには興味がなくて。[ひとにサービスをする仕事が]したかったんですね。[かつ]飛行機。車掌さんは、大学時代の就職活動では選択肢にはなかったですね。車掌さんとかは受験しなかったです。

[ぼくは、むかしから]気がつくことに興味があつたんだと思う。中学校って給食だったんですよ。うちの中学校は給食台があつて、給食台にスープとご飯とおかずとかが並んで、みんな、セルフサービスみたいな感じでいってたんですけど、[ぼくが]何人かの配膳して配ってたなら、先生がはじめられてるんだと思つたらいいんです。でも、それ、ぜんぜん、いじめとかじゃなく。それをやるのが楽しくて自分からやってあげるよってやってたんですね。けっこう興味はあつたんだと思う、気づいたり、サービスをすることとかに。

[英語は得意だったか、ですって?]好きでしたね、あと、英会話とかも楽しく。やってたいちばん根っこには、クルーになりたいからやんなきゃいけないというのがあつて。[英会話の勉強は]小学校6年生のときに、近くで、週1回、外国人の先生が教えてくれるっていうのに、少し行ったんです。中学校に入ってから、英会話スクールに行き。中学生だと基礎知識があるじゃないですか、学校での。だから、伸びたかなと思いますね。

部活? 何やってたんだろう? 中学校のときに、最初に、友だちとテニス部に入って、「あわないか

らやめよう」って言って、やめて。それ以来、部活はやってなくて、生徒会をやっていて。生徒会でけっこう忙しかった気が[します]、中学校のときは。高校は、部活は入ってなかったです。[運動は]球技、苦手でしたね。でも、それで困ったことはないですね、球技が苦手でも。学校の体育ですけど、1回1時間ぐらいでしたし。

水泳は好きでしたね。水泳もやらされてたんですね。小さいころ、喘息(ぜんそく)持ちで、体力をつけるために、水泳をやらされて。水泳も、行くのが億劫で、あまり好きじゃなかったですけど、剣道ほど苦ではなかったですね。1時間ずっと泳いでいれば終わるし。剣道って、もっと長かったんですね。まあ、泳いでるのも、疲れる前は楽しいじゃないですか。30分すぎると、もう、疲れて数メートル進むのもつらくなっていましたけど。まあ、楽しく。いまになれば、やっというてよかったな、と思いますしね。

[エロ本は買っていたか、ですって?] 中学校のころ、高校のころとかは、何冊かは買って。そこに男性とかも、けっこうちょこちょこ載ってたりするじゃないですか、[裸の女性と]一緒に。そういうので興奮したりとか。いまは[ゲイ用の雑誌って]ありますけど。[ぼくの若いころだと]それこそ、いまの『Badi』みたいな、当事者の若者向けっていうのが、あまりなかったんじゃないですかね。なんか、もうちょっと年上のひとが見るような印象がありましたね。

高校大学では女性とつきあった

[性的指向が男の子に向かっているのは自覚していながら]でも、女の子とつきあったりとか。それはありましたね。高校生、大学生、社会人[の最初]ぐらいまで。ま、いっしょにいて楽しかったりとか。あとは、男性どうしてつきあうという概念もなく。まわりが[男女で]つきあってるから。仲いい子もいるし、じゃ、つきあおうか、みたいな、そんな感じですね。だいぶ仲良くなって、

じゃあ、つきあおう、っていう感じですね。いきなり、会って、じゃあ、つきあおう、とかっていうのはなくて。

[つきあってた女の子は]あまり派手じゃなく。かわいらしい子が多かったですね。[女の子とつきあうのは]苦じゃなかったです。[でも、ドキドキは]そんなしないですね。ま、[いっしょに]いて楽しいな、っていう感じでした。——終わりは、自然消滅がだいたい多く。自分のなかで、恋愛とは少し違う感覚で、こう、だんだん……。むこうが盛り上がっちゃうと、温度差が出てくるというか。それで、だんだんと疎遠になったり。申し訳ないと、いま、思います。当時は、ほかに手段も……。あらためて、こう[自分が好きになるのは男の子だってことを]話そうっていうこともなく。

[デートは]映画館に行ったりとか……。大学生のときとかは、ひとり暮らしをしてる子だったら、むこうの家に行ったりとか、もあって。長くても半年ぐらいとかですかね。[性行為ですか?]相手にもよりますけど。高校生のときはしなかったですけど、大学以降はしてましたね。べつに、それも、嫌でもなく。[じゃ、バイセクシャルではないのか、ですって?]でも、気持ち少し違うんですね。からだは反応するんですね。射精をすれば快感はありますが、でも、同性に感じるようなドキドキは、ないですね。

大学生のころは、つきあっていることに満足を、たぶん、してたんだろうな、という[ふうに思います]。[つきあった女の子は]バイト先の子が多かったです。飛行機に乗りたかったのがあって、まず、空港でバイトをしたほうがいいだろうというんで……。

羽田空港でバイトする

就職情報誌に羽田空港でのアルバイト[の募集]があつて、ダメモトで、とりあえず電話をしてみたら、「あ、じゃあ、面接します」って言ってくれて。最後に「スーツで来てくださいね」って言わ

れて、ああ、そうなんだ、と思って。スーツがなくて、ブレザーでたぶん行ったんですよね。そして、「後日、連絡します」って言われて。ま、たぶんダメだろうと思っていて。自分のなかでは、仕事内容が飛行機の客室乗務員に似てる、電車の車内販売をやろうかなと思って、それに備えて履歴書とかを用意していたら、電話がかかってきて、「採用です」って言われて。それが、たぶんいちばんうれしかった採用ですね。クルーになったときよりもうれしかった。

〔採用されたのは〕なんでですかね？ 飛行機が好きだったから予備知識もあり、時間の制約もあまりなかったのもよかったのかも。まあ、使いやすかったんでしょうね。それで、アルバイトを空港で2年半ぐらいやりました。その後、〔日本の〕B航空の予約センターのアルバイトの募集がでて。それを受けたら、受かって。で、そこに2年間ぐらいいたんですよね。で、大学3、4年生って、就職活動をやるじゃないですか。そのときにありとあらゆる航空会社を受けてたんですよ。当時の〔国外の〕航空会社って、客室乗務員は、日本人は女性しか採用しませんっていう会社がけっこうあって。で、たとえば〔アジアの〕C航空とかD航空とかE航空とか、日本人は女性しか採らないっていう会社でも、募集が出れば、ダメモトでとりあえず送ってたんですよね、履歴書を。で、〔アジアの〕F航空も、とりあえず送ったんですよ。日本人は女性しか採用しないのは知ってたんですけど。しばらくしたら、インターネットの就職用の掲示板で、「F航空、内定、出ました」とかかっていうのが出て、ヘーって思ってたんですよ。もともと呼ばれないと思って、履歴書の練習で出したぐらいなので。そしたら、その数日後に電話がかかってきて、「いま、B航空の予約センターで働いているのであれば、うちの予約センターに空きが出たので、受験に来ませんか」と言われ、とんとん拍子で話が進み。そのとき大学の授業はゼミしかなかったの、フルタイムで、月～金、9時～5時で

行けて。で、大学4年生の夏から、F航空で働いてましたね。

〔フルタイムで働いたのは〕大学4年生のときだけですけどね。1、2、3年生は〔大学に〕行ってきました。でも、そのときも、1限の授業からだ朝の勤務は出られないんですけど、2限が10時40分ぐらいからで、そうすると、早朝の時間帯だけ仕事をして、授業へ行ったりとか、よくしてました。あと、授業が終わって、17時半からの夜のシフトに入ってとかやってました。空港がすごく好きでしたし、ぜんぜん苦じゃなかったですね。

客室乗務員の夢がかなう

〔高校は付属高校へ行きました。〕親が「付属にしかない」という話をして。まあ、それにはとくに異論もなく。受かったのがそこだけだったので。〔高3の〕秋に〔大学進学のための〕付属高の試験があるんですけど。それで、点数ごとに〔進学できる学部が分かれる〕。何点だからどこ、みたいなのがあって。だいたい〔どこかへ〕行けますね。

〔行ったのは〕経済学部。実際に客室乗務員になれるっていうのは、自分のなかで思ってたなくて。なりたいたいけれども、むずかしいだろうっていうのがあったんですよ。じゃあ、就職活動をするときに、クルーにも近いけれども、一般企業を受けるにはどこがいいかなと考えて。経済学部だったら、一般企業の営業職も受験しやすいかなと思って。

卒業したときは、F航空で普通に働いてましたね。月～金の9時～5時で。〔そして〕大学を出た年の12月に、〔アジアの〕G航空。そこで客室乗務員として採用されて。はい。〔応募の倍率は〕100倍ぐらい。〔通ったのは〕なんででしょうね（笑い）。たまたま、縁があり。まあ、F航空へ入ってから、ずうっと、いろんな会社を受けてたんですけど、まあ、合格をいただいたのがG航空だけだったので。